未来予想図（みらいよそうず）

寝屋川市立梅が丘小学校　　２０２３・１０・６

校長室通信　　No. ２７

保護者の皆様へ

混沌の中に
光を求めて・・・（その2）

前号からの続きです。

＜まさか、主人が！！＞

昭和38年7月4日の昼過ぎ、私は長女を近所に預け、6か月になる長男を連れて小学校へ予防接種に行きました。接種場所である体育館に入ろうとした時に、マイク放送で私の名前が呼ばれるのに気付き、後ろを振り向くと、制服の警察官が顔面蒼白で立っておられるのがぱっと飛び込んできました。そのとき、私はどう表現したらいいのかわかりませんが、何かものすごく強い印象を受けました。

その警察官に案内されて車に乗ると、車内には近所に預けたはずの娘が署長に抱かれていました。署長から、「ご主人は、けがをされて今、病院で手当てを受けています。大丈夫ですよ。奥さん、しっかりしてください。」と言われましたが、後のことはよく覚えていません。

病院に向かう途中、私は夫が死ぬのではないか、私たち親子3人は、これからどうやって生活していけばいいのかなど、悪いことばかり考えていました。

同じ年の1月、大阪府警の白バイ警察官が亡くなられたときに、夫は私に、「もしも僕の身に何かあって、迎えに来るようなことがあれば、死ぬと覚悟して来なさい。警察官というものは、高い志を持って警察官になったものの集団だ。毅然としているんだよ。君は子どもたちの親なのだから・・・。」と言ったことを思い出していました。このとき、車内の雰囲気で夫は死ぬと覚悟しました。

病院に着き、2人の子どもを連れて病室へ入ると、夫は頸動脈に赤黒い打撲があるだけで、今朝、元気に出かけたままの顔で、「ちょっと眠るよ。」という感じで横になっていました。長女がベッドの柵につかまって、「パパ、パパ」と呼んでいましたが、お医者さんから廊下に出るように言われて、病室を後にしました。

数分後、夫のうめき声が聞こえ、すぐに病室に入りました。静寂の中でお医者さんから、「ご臨終です。」と告げられました。多分、私たちが病院に着くまで生かせておいてくださったのでしょう。

私たち家族にとって、一家の大黒柱である夫の死は、予告なく突然にやってきました。残された家族の夢や希望は、一瞬にして打ち消され、本人のこれからの人生の一切を根こそぎ奪い取られました。そのとき、私は23歳、長女は3歳、長男は6ヶ月でした。

＜永遠の別れ＞

私は、遺体が家に帰ってきたことも、子どもたちにどのように接したのかもよく覚えていません。母乳がそのときから止まったことだけは覚えているのですが・・・。

気が付いたときには、実家の母がそばにいてくれました。その後、葬儀・公葬・慰霊祭が営まれたのですが、私にはそのときの状況が思い出せません。後日、そのときの写真を見て、「このように進められたのか。」と思うだけです。

今日ここでお話しするために、何か思い出そうとするのですが・・・。残っているものと言えば、母が大事に残してくれていた「夫死す。すぐ来い。」という、私が母にあてた電報だけです。

今も、夫の事故現場を通ることを避けていますし、その近くを通るだけで心臓がバクバクしてしまいます。夫は事故の直後、立って歩いていたということを聞いて、そのとき何を思ったのだろうかと思うだけで苦しくなるのです。

交野市にある警察学校に夫の遺品が置かれており、1度だけ参りました。でも、2度とその遺品の前に立つことはできませんでした。

＜心の闇を抱えて＞

実家の母も親類も去り、親子3人の生活が始まりました。いつものように朝が来て夜が来るのですが、今までとは違う朝と夜が来るのです。夫の下着をそろえることもなく、主のいなくなった今は、衣服の入ったタンスを開けることもなくなりました。この前まで、幸せすぎるほどの毎日がこの手の中にあったのに・・・。父親に手を引かれ、楽しそうにはしゃぐほかの家族の団らんなどを、もの悲しそうに見ている長女を見て、私は胸が張り裂けるような気持ちになりました。

そして、いつの間にか夫を恨み、次々と怒りがわいてきました。

「私たちを置いて、なぜ先にいってしまったの。」と毎日毎日、死んだ夫を責め続けました。

しかし、時間の経過とともに、今度は、「夫はなぜ死んだのだろう。それは私に責任があるのではないのか。私と結婚しなかったら、死なずに済んだのでないか。こんな私は生きている価値のない人間ではないのか。私が夫を死なせたのだ。子どもが悲しむようなことをさせたのは私だ。」と自分を責めるようになりました。

そして、深く責め続けて眠れない毎日が続きました。このようにして、自分を責めることで、心の痛みを隠して、かろうじて生きていけるような気がしていたのです。親にさえ話せず、泣くこともできず、悲しみを心の奥にしまい込んで過ごす日々でした。

このように、私が心の闇を抱えていても、誰にも気付かれることはありませんでした。署長はいつも気にかけてくださいました。殉職警察官を出したということで、その心痛はいかばかりであったことでしょう。それなのに、署員の方々の気持ちなど理解せず、自分との戦いに疲れ果てていきました。

＜ママ、笑ってよ！！＞

日ごとに自分を追いつめていくうちに、精神的にずたずたになり、「生きる価値のない私は死ぬしかない。でも2人の子どもはどうしよう。」と考えるようになりました。家の整理を済ませ、3歳の娘の手を引き、息子を背負い、死に場所を求めてさ迷うようになりました。

そんなある夜、夢の中で、新聞の三面記事の上段に「殉職警官の妻、子どもを道連れに後追い心中」という見出しが大きく出ていました。生活の疲れや悲しみで、殉職した夫の後を追い、自殺するという内容です。

はっとして目覚め、「ああ、夢だったのか」・・」と起きて、子どもの寝顔を見つめていると、寝ていたはずの長女が目を開けて、「ママ、笑ってよ。ねえママ。」

その言葉を聞いたとき、体の中に熱い稲妻のようなものを感じました。自分の中で何かがはじけ、自分が変わった瞬間でした。全身から、この数か月間の心の痛みをすべて洗い流してくれるほどの涙があふれてきました。今まで、泣くことも笑うこともできず、氷のような心になっていた自分でしたから・・・。

「何も今死ななくても、遅かれ早かれ、人はいつか死ぬ。」 このとき初めて、夫の死を受け入れることができ、自分に対する怒りの鎖がパチパチと切れる音が聞こえたのです。

（NO.28へ続く）